

「北尾次郎 研究報告書」の衝撃

— 広瀬毅彦論文の謎 —

林 尚孝

広瀬毅彦氏から送られてきた文科省科研費報告書「北尾次郎ルネサンスプロジェクト研究報告書」（以下「報告書」）に記載された二つの広瀬論文には「舞姫」に関する多くの新見が盛り込まれていて衝撃を受けた。大部分が初めて見る所説であり、筆者にはその当否を判断することはできなかったが、「舞姫」研究にとって重要な提起をしていることは確かである。その中でも、太田豊太郎のモデルとして北尾次郎を逸することはできないという主張は私を納得させた。「鵬外」九九号の拙稿「舞姫」の相澤謙吉のモデルは誰か」に、この新説を紹介した。

本稿では、広瀬毅彦氏が、なぜ北尾次郎という人物に着目したのか、なぜ膨大な蓄積のある「舞姫」研究に衝撃的な新見を付加することができたのか、という謎解きについて書いておきたい。

「鵬外」九九号への論考をほぼ書き上げ、推敲に取りかかっていた三月一七日、広瀬毅彦氏からレターバックライトが届いた。添付された書簡に、「引用文献等でお世話になりました方に、報告書を送付」とあって、論文の要約、自己紹介が書かれていた。付箋が付けられた頁には、筆者が小金井良精日記の全

文翻刻をした記事（「鵬外」第八九号）が引用されており、それに続いて「もし、筆者が仮定したように、在留ドイツ人の家庭で働くことを約して、結婚目的を隠して来日した事情があったとすれば」との文言があり、これまで見たこともないエリーゼ来日に関わる費用仮説が書かれていて驚いた。

三月一九日、森川昭兄（東大名誉教授）から電話があった。東大教養学部以来の友人であるが、理系から文転し文学部国文学科に進んだ変わり種である。「林君の研究と関係ある文献を入手したが、転送しようか」とのこと。それは広瀬毅彦氏の研究報告書ではないか」と尋ねると、その通りとのこと。その偶然性に驚いた。森川兄は芭蕉の研究者で、芭蕉と交際があった下里知足の日記を翻刻し、昨年八七八頁の労作『下里知足の文事の研究 第二部論文篇 第三部年表篇』（和泉書院）を刊行されている。広瀬氏との関係を尋ねたところ、下里知足研究を通して、知り合ったとのことであった。

広瀬氏もユニークな経歴をもつ。「報告書」にある肩書きは「芦屋れんが博物館 館長」となっている。一九六〇年生。東京大学文学部社会学科を卒業し、東大大学院農学研究所修士課程修了後、東大法学部を卒業。ドイツのブランデンブルク州に別宅をもち、クラインガルテン制度の研究や建築史など幅広い研究

を行う在野の研究者である。

「報告書」には、西脇宏（島根大学外国語センター教授）を研究代表者として、四篇の論文が掲載されている。廣田勇京都大学名誉教授による「我が国の気象学に見る北尾次郎の系譜」八頁、西脇宏教授による「Diro Kitao *Waldynpbe* - Erstruck des handschriften Textes (3)」、九〇頁と後述の広瀬毅彦氏による二篇の論文、第一論文九一頁と第二論文二八頁である。その他末尾に北尾次郎の描いたカラー印刷の絵画八頁が付けられている。

付箋の付けられた第二論文は、「北尾次郎周辺から見た『舞姫』成立過程」で、副題は「鵬外『舞姫』主人公モデルとしての北尾次郎と『東亜 (Ost-Asien)』掲載・独語版『舞姫』から見た『重瓦船中稿』存在可能性について」であり、二八頁（四百字詰原稿用紙で約百枚）の論考である。

北尾次郎という名前を見た覚えすらない。第二論文の冒頭に、北尾次郎（一八五六～一九〇七）について以下の紹介がある。

北尾次郎は、三宅雪嶺によって、明治第一の天才と賞賛され、東大教授として、物理学、森林物理学、気象学等を講義した。その一方で、約一四年間にもわたる、一四歳からのベルリン長期留学を経験し、ドイツ語には堪能、ゲーテの作品（「広瀬註「ファウスト」」よりも長編だといわ

れる小説を、ひとり黙々とドイツ語で書き綴っていった。日本語ではなく、いきなりドイツ語で、それも物理学や気象学の研究の傍ら長編小説を書けたという点一つからでも、大天才であったことは容易に想像が付く。

『報告書』を見ると、この他にも、二十歳でゲッチンゲン大学で理学博士号を取得、絵画や挿絵に堪能で、『普国憲法起源史』を刊行し、第一論文の主題である、東京江戸たてももの園にある「デ・ラランデ邸」の設計者でもあるという。

鷗外との関係で注目されるのは、北尾次郎と鷗外らが東京で編集し、ベルリンでドイツ語の文芸誌『東漸雑誌』"Von West nach Ost"を一八八九年一月刊行し、その一年後「舞姫」が発表されたという指摘である。それにも関わらず、鷗外は北尾次郎との交際についてほとんど触れていないという。

『鷗外』誌への投稿を終え、第一論文「建築家としての北尾次郎」を読み始めた。現在、東京都小金井市にある都立江戸東京たてももの園に「デ・ラランデ邸」として復元保存されている建物は、借家人であるテラランデの設計ではなく、北尾次郎が設計した自邸であると主張である。東京都は「デ・ラランデ」と表記しているが、広瀬氏は本人の署名「テラランデ」を用い、紛らわしい。たてももの園が調査

検証結果をまとめた二篇の報告書に対して、広瀬氏は実地調査や史料に基づいた緻密な反論を行い、完膚なきまでに東京都の報告書の誤りを指摘している。どうして、こんな詳細な調査が出来たのだろうか。

広瀬氏は、筆者が森川兄の友人であるとして、『風見鶏 謎解きの旅』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇九年八月）を送って下さった。神戸市北野にあった異人館を中心に掲げられた膨大な写真とネガ（渥美健一氏とフライ博士 Dr. Frye による）を詳細に検証し、当時の神戸の風物とドイツ人の生活を明らかにしている。この作業の中からエリーゼ来日の新仮説を得たものと思われる。さらに、神戸市北野の異人館トーマス邸（風見鶏の館）についての設計者を特定し、その生家を訪ねる謎解きの旅が最終テーマである。広瀬氏は、これまで不明であった設計図を発見し、テラランデのサインから設計者がテラランデであることを特定した。これにより、神戸市による「風見鶏の館」の建築年表記の誤りを明らかにした。さらに、テラランデの生地、ヒルシュベルク市（現在はポーランド領のイエレニャ・グラ市）を訪ね、現存するテラランデ父子による幾つかの建物を精査して、謎解きを完結させている。

「デ・ラランデ邸」を見た広瀬氏は、一見してテラランデの作風と違うことに気づき、北

尾次郎が設計者であることを知ったに違いない。ドイツ語に堪能であり、ベルリン郊外に別宅を持つこともあって、北尾について現地調査を開始したのではないか。北尾次郎については、生年すら不明であった。鷗外と同様に生年を偽って留学条件に合わせたのが原因である。生年が一八五三年か、一八五四年かが争われていた。広瀬氏は、ベルリン大学に提出された北尾の自筆履歴書原本を探し出し、「一八五六年八月二十四日生まれ」であると特定した。彼の研究は、手堅く現地主義と実証主義を貫いている。広瀬氏の北尾次郎に関する研究は、先行するテラランデ研究を軸に展開されたことが、「風見鶏 謎解きの旅」などにより推察できた。

森川兄と広瀬氏の不思議な縁により、筆者なりに広瀬論文成立の謎に迫ることができたように思う。



(撮影者 倉本幸弘)

壽 鷗 外 記 念 會 通 信

No.196 秋

【編集後記】

ゆく秋の大和の国の薬師寺の

塔の上なる一ひらの雲

佐佐木信綱のよく知られた歌です。

この「通信」秋号の編集を始めたのは残暑の厳しい頃でした。そして今は、武蔵の国の秋も深まってゆこうとしています。

観潮楼址の庭の植物―銀杏、沙羅の木、山萩、連翹、山紅葉、等々―が花をつけたり紅葉を始めたり葉を散らしたりと、秋らしい装いです。近くの本郷や上野の丘でも木々の落葉が始まり、不忍池には鴨やゆりかもめなどの越冬の鳥が姿を現しました。

今号も多くの投稿がありました。前号からお待ちいただいたいた方のもも併せて一六頁になりました。「鷗外」誌が一〇〇号を迎えますが、昭和四〇年四月に創刊された「記念会通信」もまもなく二〇〇号を迎えます。

森鷗外記念会通信

No. 196

発行 平成二十八年十一月五日

編集責任者 倉本幸弘

発行所 森鷗外記念会

郵便番号・一二三―〇〇二二

東京都文京区千駄木三丁目三十六番五号

森鷗外記念会事務局

電話 〇三―三八二四―九四四五

(e-mail) qkz5f3d@solid.ocn.ne.jp